

〔十六夜日記〕廿三日○建治三年十月てんりうのわたりといふ舟にのるに、西行がむかしもおもひ出られて、いと心ぼそしきみあはせたる舟たゞひとつにて、おほくの人のゆき、にさしかへるひまもなし、

水のあわのうき世に渡るほどをみよ早瀬の小舟竿もやすめす

〔太平記〕俊基朝臣再關東下向ノ事

旅館ノ燈幽ニシテ、鶏鳴曉ヲ催セバ、匹馬風ニ嘶テ、天龍川ヲ打渡、小夜ノ中山越行ケバ、白雲路ヲ埋來テ、ソコトモ知ラヌ夕暮ニ、家郷ノ天ヲ望テモ、昔西行法師ガ命也ケリト詠ツ、二度越シ跡マデモ、浦山敷ゾ思ハレケル、

〔梅松論〕上今年建武二年には御所尊氏直義○略中御入洛○略中海道は山河の間に足が、りの難所に付、合戦治定有べしと覺えし處に、天龍川の橋をつよくかけて、渡守を以て警固す○略中橋をば誰か沙汰して渡したりけるぞと尋ねられしかば、渡守共云、此間の亂に、我々は山林に隠忍候て、舟どもをば所々に置て候ひしに、新田殿○義當所に御著有て、河には瀬なし、敗軍なれ共大勢なり、馬にて渡すべきにあらず、又舟を以渡さばをそくして、味方を一人成ともうしなはん事不便なるべし、いそぎ浮橋をかくべし、難澀せしめば、汝等を誅すべしと御成敗候しほどに、三日の間に橋をかけ出して候なり、

〔太平記〕十四官軍引退箱根事

十二月○建武十四日ノ暮程ニ、天龍河ノ東ノ宿ニ著給ニケリ、時節河上ニ雨降テ、河ノ水岸ヲ浸セリ、長途ニ渡レタル人馬ナレバ、渡ス事叶マジトテ、俄ニ在家ヲコボチテ、浮橋ヲゾ渡サレケル、〔宗長手記〕明る夏五月○永正十三年下旬、かの城源嶽城○遠江國にうちむかはる、○今川親折節洪水○龍川大海のごとし、舟橋をかけ、舟數三百餘艘、竹の大繩十重廿重、只陸地ににたり、此橋の祝として千句あり、